

学会・研究会等の活動

◆中国建築史研究会

田中淡教授(京大人文研)を中心とする中国建築史研究会が2年振りに復活し、都城建築復元に関する文献講読を行った。5月26日、6月15日、7月22日は福田美穂(京大大学院)が楊勛勛「対含元殿遺址及原狀の探討」(『文物』1998年4期)を、10月22日と2月23日は北田裕之(京大大学院)が楊勛勛「唐長安城明德門復元探討」(『文物』1996年4期)を翻訳し、その訳稿を全員で検討した。なお、含元殿論文の翻訳は『仏教芸術』246号に掲載された。このほか1月29日には、京大人文研に招聘されていた、国立シンガポール大学の王才強副教授の特別講演会を開催した。王氏はCGを駆使した唐宋時代都市景観の復元研究により、UCバークレー校からph.Dを取得し、その主要部分を出版したばかり。講演の演題は「唐長安城のCG復元研究」で、日本の建築史研究者や考古学者と活発な議論が交わされた。(浅川滋男)

◆漢長安城日中共同発掘調査講演会

8月7日、平城宮跡資料館講堂において、中国社会科学院考古研究所(考古研)と共同で進めている漢長安城桂宮第2次発掘調査の成果報告会を開催した。成果報告の講演は、漢長安城考古隊長の李毓芳研究員(考古研)が担当した。演題は「漢長安城桂宮2号建築遺跡B区の発掘調査」である。2号建築遺跡が全体として「前朝後寝」式の配置をとり、未央宮椒房殿と類似するが、両者の規模や構造に若干の差異を認めうることなどが報告された。続いて、殷周考古学の専門家、鄭若葵研究員(考古研)が「長江三峡ダム地区の考古学的新発見」と題する講演を行い、未発表出土遺物等に注目が集まった。通訳はいずれも浅川と朱岩石(考古研研究員/国学院大学留学中)が担当した。お盆前ということもあり、聴衆は120名足らずで、前年の180名を下まわった。(浅川滋男)

◆藤原京研究会

大藤原京城確認のための調査研究の一環として開催しており、今年で2回目であ

る。第1回目は条坊道路の調査成果を中心として行ったが、本年は2000年3月18日に、宅地遺構の調査成果の検討を主題として行った。藤原京以降の都城の状況を参考にすべく、山中章氏(三重大学)の基調報告「平安京解体過程からみた古代王権の宮都観—宅地利用にみる古代王権の都市像—」、武田和哉氏(奈良市教育委員会)による平城京における宅地遺構の成果報告が行われた。その後、竹田政敬氏(橿原市教育委員会)、長尾充氏(奈文研)から藤原京の成果報告があった。藤原京の宅地遺構は、宅地割りが序々に判明してきているが、建物配置の状況や、宅地の大きさと京内での位置・建物の規模などが、どのような関係をもつのかなどの検討には、まだ資料不足である。これまで同様、条坊道路を中心とした地道な調査の積み重ねが必要である。

(安田龍太郎)

◆条里制・古代都市研究会

2000年3月4～5日に、第16回大会を開催した。一日目は「遷都の諸問題」をテーマとする研究報告で、文献史学サイドからは、遷宮や遷都の背景が上げられ、大極殿の成立と歴代遷都廃止との関係が論じられた。また、後期難波宮について、難波京の分析も踏まえてその特徴が明らかにされ、長岡宮への移築の問題が論じられ、恭仁宮についても発掘調査成果が報告され、討議が交わされた。二日目には各地の調査事例が報告された。滋賀県岡町遺跡の調査では、出土木簡について、その年代や税物の運送に関する分析結果が報告された。宮城県角田郡山遺跡の調査では、伊具郡衛正倉院の発掘成果が紹介された。島根県古志本郷遺跡の調査では、『出雲国風土記』にみえる「神門郡家」に比定できる官衙遺構が報告された。また、中世における耕地開発の事例として奈良県中付田遺跡の水田遺構が紹介され、耕地開発の過程についての報告があった。(山中敏史)

◆木簡学会

1999年12月4～5日の研究集会では、研究報告として山口英男「帳簿と木簡」、木簡の出土事例報告として、吉川聡「1999年全国出土の木簡」、江浦洋「難波宮跡 北

西部出土の木簡」、熱田貴保「出雲市・三田谷I遺跡出土の木簡」、永松みゆき・館野和己「大分県国東町飯塚遺跡と出土木簡」の報告があった。

山口報告は東大寺写経所の帳簿による事務処理システムと比較しながら、記録木簡を検討し、同じ機能を持つものが紙の文書にも木簡にもあるなどの両者の共通点と相違点を指摘し、また各文書木簡に名称を付けるべきとの提言を行った。吉川報告は、全国81遺跡から出土した木簡の概略を紹介した。江浦報告の扱う木簡は「戊申年(648)」を含む7世紀中葉のもので、前期難波宮の評価に関わる重要性を持つ。熱田氏は「八野郷」「高岸」など出雲国神門郡に属する郷名を記す木簡から、三田谷I遺跡が神門郡家に関連する遺跡であることを指摘した。永松・館野報告は、飯塚遺跡から出土した約50点の木簡群が、9世紀頃の水田経営と木製品・金属製品製造の複合的経営を物語るものであり、国崎津による交通とも関わる可能性を指摘した。

なお「飛鳥池遺跡の保存・活用についての要望書」を総会で採択し、また「木簡研究」21号を刊行した(編集担当:館野和己)。(館野和己)

◆埋蔵文化財写真技術研究会

1999年7月2～3日に第11回総会および研究会を行った。

7月2日:総会 参加者148名(含委任状)・講演 参加者103名「私と文化財写真」(佃幹雄氏;元奈文研)

7月3日:講演 参加者115名「製版データ利用についての現状と問題点」(木村恭也氏;岡村印刷工業(株))「デジタルデータ利用の現状と問題点」(川瀬敏雄氏;(株)堀内カラー)「公開データベースへの道」(森本晋氏;奈文研)「新製品モノクロフィルムの使用と展開」(井本昭氏;近代カラー「写真天国」・杉本和樹氏;西大寺フォト・中村一郎氏;奈文研)・公開討論 参加者122名「文化財写真のこれから」

2日目の公開討論会は大変盛況で、参加者がそれぞれ日頃から抱えている悩みや疑問を公開の場で質問、討議する中で解決への糸口を見つけた。(中村一郎)

◆「神社建築を考える」会

日本で「神」が、社殿という建物に住むのはいつからだろうか。かつては姿かたちがない八百万神が仏像の影響によって人間の姿（人格神）となり、社殿に住むようになるとされてきた。この説では社殿の成立は、仏教が伝来した6世紀中葉以降になる。近年、通説を否定し弥生・古墳時代にすでに神社があったとする説が、マスコミを通じて急速に浸透してきた。その根拠は、伊勢神宮正殿と似た独立棟持柱建物の発見や、伊勢の建物配置との類似である。

これに対して建築史、文献史料、考古学の立場から検討を加えた。棟持柱は構造上必須な装置で、棟持柱建物即神社と見ることに合理的根拠がないこと、伊勢の正殿には古い建築様式が残ったと見るべきことなど、少なくとも令制下の神社と「弥生・古墳神殿」は別とする見方が大勢であった。検討成果は埋文研修テキスト『信仰関連遺跡調査課程』（2000年5月発行）に収録した。（金子裕之）

◆国際セミナー「東南アジアの新石器時代遺跡」

アンコール文化遺産保護共同研究事業の関連事業として、平成11年11月15日月曜日の午後2時から5時まで、研究所の小講堂において、表記のセミナーを開催した。講演は以下の4件である。

1. 新田栄治氏（鹿児島大学）
「メコン流域における文明化前史－近年の考古学研究の成果に基づいて－」
2. 山形真理子氏（東京大学）
「ベトナム中・南部の先史時代と初期王国の出現」
3. Min Aung Thwe氏（東京大学）
「南部ビルマの新石器時代－サロウィン川河口地域を中心に－」
4. Voeun Vuthy、Heng Sophady、Mao Someaphyvath氏（プノンペン王立芸術大学）
「Circular Earthwork Krek 62/52の発掘成果について」

今回は東南アジアの新石器時代遺跡をテーマに、最近の調査成果の紹介を中心に、上記の各氏にご講演いただいた。

（西村 康・杉山 洋）

◆建築史談話会

1999年度は以下の研究発表と現場見学会を行った。見学会は参加者が多いものの、研究発表の際は顔ぶれが限られる。研究発表にもどんどん参加してほしい。4月17日：藤川昌樹（筑波大）「中・近世高野山における「谷」の構成と変遷」・豊城浩行（滋賀県教委）「文化財建造物における保存修理の課題－重要文化財若宮神社本殿の保存修理を通して－」。5月22日：唐招提寺金堂修理現場見学会。6月26日：川本重雄（京都女子大）「日本住宅史の再構築－壁の空間と柱の空間－」・藤田盟見（名古屋造形芸大）「鎌倉時代の書院造の二、三の問題－武士住宅を通して－」。7月17日：粉河寺大門修理現場見学会。10月16日：冷泉家修理現場見学会。11月20日：森村家修理現場見学会。12月11日：妻木宣嗣（大阪工大）「近世における建築規制に対する大阪町奉行所・大工組織・大工・施主の対応に関する研究」・川本重雄「南禅寺方丈の調査報告」

（箱崎和久）

◆平城宮第一次大極殿復原研究会

実施設計が進められている平城宮第一次大極殿の細部の仕様を定めるべく、古代建築の基壇、木部、瓦葺き、彩色、金具等の意匠、納まり等に関する研究会を、昨年度から継続的に実施している。本年度においては下記の研究会を開催した。

1999年6月2日「古代寺院のけらば瓦」花谷浩（奈文研）、2000年2月2日「鴨尾について」大脇潔（近畿大学）、2月8日「古代建築の架構（軸部・組物）～第一次大極殿5分の1模型を題材として～」村田健一（奈文研）・春日井道彦（文建協）、2月10日「金具取付箇所・仕様、彩色範囲・内容」、2月29日「古代の本瓦の葺き方について」山本清一（文化庁・選定保存技術保持者）、3月16日「中国の宮殿建築の彩色について」福田美穂（京都大学）・「文献資料からみた大極殿の壁」館野和己（奈文研）。

これらの研究会での成果は、大極殿復原設計にいかされる。また、近々各研究会の記録を出版することになっている。

（村田健一）

◆鳥取県上原遺跡出土遺物の調査

因幡国気多郡衛か豪族居宅とみられる遺跡で、1978～82年に発掘され、土器と瓦の調査を開始。土師器には、赤色塗彩に数種類があり、瓦では軒瓦の一部が隣国の伯耆国分寺と同范であることが判明。製作技法上注目すべきものが多い。

（山中敏史）

◆御子ヶ谷遺跡出土文字資料の調査

駿河国志太郡衛とみられる御子ヶ谷遺跡出土の木簡・墨書土器の釈文や製作技法などの再調査。赤外線テレビによる調査で、新たに「税長」の文字を釈読できるなどの新知見を得た。また、墨書土器でも釈文の改訂を行い、墨書部位・器種・製作技法などにも注意して観察し、同筆関係についても検討。（山中敏史・渡辺晃宏）

◆河南省鞏義市唐三彩窯の踏査

名古屋大学名誉教授橋崎彰一氏を通じて、河南省文物考古研究所からの唐三彩窯共同調査の要請があり、5月に中国側の意向確認と現地の下見を行った。新規事業として予算要求。平成12年3月、町田所長、田辺部長、玉田と共に現地を訪ね、友好共同研究議定書を交わし、今後の調査計画を協議。（巽 淳一郎）

◆京都を中心にした近代日本庭園の研究

所内特別研究費の交付を受け、「京都を中心にした近代日本庭園の研究」（140ページ）を300部印刷・刊行。筆者の学位論文（1998年3月・京都大学）に加筆したもの。明治～昭和初期の京都の造園家・小川治兵衛（植治）の作庭に関する考察と同時期の日本画家の庭園への関与についての考察。（小野健吉）

◆国際会議Art' 99に参加

1999年5月17～20日、ローマ大学で行われた「Art' 99－第6回国際文化財非破壊測定会議－」にて講演を行った。演題「the application of high-energy X-ray CT in the examination of archaeological objects excavated in Japan」によって、X線CTに関する最新の研究を紹介した。

（村上 隆・肥塚隆保）